

# 聴覚障害学生の支援ニーズ表明に関わる支援のあり方の検討

支援担当者への面接調査から

○中島亜紀子

（筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター）

KEY WORDS: 聴覚障害学生 合理的配慮 意思表明

## 1. 目的

障害者差別解消法の施行を受け、大学等高等教育機関（以下、大学等）では障害学生からの意思表明に基づき、本人との建設的対話を経て合理的配慮の提供を行うことが責務となった。大学等で学ぶ聴覚障害学生については、各大学等で人的支援を行う体制整備や支援機器の活用が徐々に進みつつある一方、聴覚障害学生による意思表明、すなわち支援ニーズの表明が円滑になされるための環境や働きかけは未だ十分に整備されていない。更に 2020 年度、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴うキャンパス閉鎖やオンライン授業導入により、聴覚障害学生のニーズ把握が物理的にも難しい状況となったことで、本人のニーズ表明を引き出す重要性が浮き彫りとなった。本研究では、合理的配慮の決定過程において聴覚障害学生が自らニーズを表明するための具体的な方策及び課題を明らかにすることを目的として、大学等の障害学生支援担当者を対象に行った面接調査から、支援実践の事例及びその傾向について分析した。

## 2. 方法

### 1) 調査概要と対象者

大学等の支援室、特別支援学校等で聴覚障害のある学生または児童・生徒への支援に先駆的に携わってきた支援担当者 5 名を対象に、半構造化面接の方法で 2020 年 1 月～2021 年 2 月の間に調査を実施した。対象者と筆者が対面又はテレビ会議システムを用い、対象者に聴覚障害がある場合は手話や筆談等を用いながら行った。実施にあたり、本学術倫理委員会の承認を受け（承認番号 2019-35）、対象者に研究趣旨を説明し書面での同意を得た。

### 2) 調査項目

対象者の支援経験をもとに、聴覚障害学生の支援に関する知識獲得やニーズ表明に関して、①入学前の課題や実践事例、②入学後の課題や実践事例、③その他現状の課題や実践事例、について話をきいた。

### 3) 分析方法

録音した音声データの文字起こし、あるいは録画した手話による回答の動画を筆者が日本語に翻訳した文字起こしを作成した。これらの文字起こしデータから、特定の学生及び児童・生徒に対して行われた支援ニーズの表明に関わる環境整備や働きかけについての具体的な取組例及びエピソードに該当する箇所を抽出した。内容及び対象児・者の特性にはその概略を表す端的なコードを付与し、取組時期も含め分析を行った。

## 3. 結果

文字起こしデータから、小学校から大学卒業後までの時期を含む 20 件のエピソードが抽出された。各エピソードは、対象となる学生・児童生徒の特性またはその時期に現れた課題や本人の悩みに対し、各支援担当者が個別に働きかけた内容であったが、対象児・者の特性や実施時期が異なるエピソード間で、同一または近似する内容のものが見られた。また、ある対象児・者の特性に対する働きかけとして複数のコードで表現されるエピソード群が存在していた。表 1 に、対象児・者の特性ごとの内容（コード）で、複数の内容が挙げられたもののみ抜粋して示した。また具

体的な働きかけの例を図 1 に示した。

表 1 対象児・者の特性ごとの働きかけの内容と時期

対象児/者の特性	内容	時期
支援を利用しない	支援者からの問題提起	大学
	共通点のある仲間からの助言	大学
	支援を使わない選択の尊重	大学
	障害の捉え方への助言	就活時
	過去の支援利用経験からの触発	就労後
聴覚活用/音声を中心に用いる	障害の捉え方への助言	大学
	共通点のある仲間の紹介	大学
地域校出身	行事での情報保障体験	小学校
	自己紹介の機会設定	大学
聴覚特別支援学校出身	視野・経験を広げる機会設定	大学 入学前
	支援依頼をしやすくする	大学
	根回し	入学前
	多様なコミュニケーション方法の提示	大学 入学前
	支援を利用する機会の設定	大学

内容 1 声で話す学生は常に筆談を依頼することもなく、障害について誤解を受けやすいため、ちょっとした支援の頼み方をその都度助言した。  
内容 2 中等度難聴の学生には、似たような聴力で音声を使っている人を紹介した。その方が、大学でどのように授業受けているといった経験談や助言が入りやすい。

図 1 音声を中心に用いる学生への働きかけの内容例

この他、単一の事例として、「これまで口話中心でコミュニケーションを取ってきた学生に対し、聴者と十分通じ合っていない場面を流さずその都度意識づけし、自身にとって確実な方法は何かに気づききっかけを与える」、「大学進学を目指す難聴高校生に、希望進路に近い聴覚障害学生を紹介し経験談をきく」等の個別的な対応の例が見られた。

## 4. 考察

支援ニーズ表明を支える働きかけとして入学前に必要な事柄については、情報保障の利用経験や自己開示の経験等が挙げられているが（中島、2020）、実際には初等教育段階から大学卒業後の広い期間にかけて、学生個別への細やかな働きかけの実践が見られた。こうした取組や支援の観点について更に事例を収集し普及するとともに、そうした支援はどの機関でいつ誰が提供するか、何を大学での支援として行うかという点についても、更なる検討が求められる。

## 5. 文献

中島亜紀子（2020）合理的配慮の決定過程における聴覚障害学生への支援に関する予備的調査.日本特殊教育学会第 58 回大会論文集.p2-30.

付記：本研究は科学研究費助成事業（課題番号（19K02927）の成果である。（NAKAJIMA Akiko）